

## 謝 辞

——伊藤先生と「エイコス」の仲間たち——

皆 吉 郷 平

今回「エイコス」XVI、伊藤洋先生退官記念号を刊行するに当たり、先生に学恩のある「エイコス」の仲間たちを代表して伊藤先生に謝辞を述べたいと思います。

この小文では、よい機会ですので、17世紀フランス演劇研究会の立ち上げ、「エイコス」創刊の経緯から現在にいたるまでの約35年を簡単に振り返ります。

伊藤先生と小生の最初の出会いは、確か1969年の暮れか'70年の初めだったと思います。'69年の秋頃、故岩瀬孝先生から、ガラボン先生の下で「バロック演劇」についての博士論文を書かれた優秀な研究者が帰国し早稲田に戻ってこられたと伺いました。その方が伊藤先生だったのです。早速小生は失礼を省みず強引に先生に面会を求め、有楽町の喫茶店で始めてお会いしました。そして、これまた強引にコルネユのテキストの精読会の主宰をお願いしました。17世紀前半の未翻訳の演劇作品の演劇的、かつ正しい読み方に確信の持てなかった小生の必死の願いが通じ、先生の快諾を得ました。1970年度は、小生と大学院に入ったばかりでコルネユ研究に進むことを決めた橋本君の二人が生徒で、コルネユの「メリット」を読みました。伊藤先生のご指導は、温厚な顔に似ず学生・院生を激しくのしり罵倒する岩瀬先生とは大いに趣が異なり、厳しい中にも優しいものでした。1971年からは、ラシーヌを勉強する野池さん、関谷さん、少し遅れて小生と同じ慶應からアルデイの研究を始めた神保君が加わり、本格的な精読会が発足し、毎週土曜日伊藤研究室で開かれるようになりました。校訂版のある1630年代の演劇作品を次々に読むことになりました。当時我々は、先生に作品を演劇的に読むことを徹底的に鍛えられたと思います。そして'30年代の作品を読みつづけるうちに、先生のおっしゃる「フランス古典悲劇生成の秘密を作品の上から探る」ことの意味が大分実感されるようになりました。ただ一方で、先生も都立西高校時代から演劇現場に携わっておられ、小生なども大学時代から劇団活動をしていたこともあり、常に（現代における）上演をも意識しながら議論し、いずれは我々の手でコルネユの「イリュズイオン・コミック」を先生訳「舞台は夢」（『コルネユ名作集』所収1975）で上演したいなどと語り合っていました。

1975年頃から、教育大で故辻先生に鍛えられたゴリゴリの劇文学派のコルネリヤン小林君が参加するようになりました。彼の参加で、例会も従来の真剣ではあるが穏やかな精読会的雰囲気から、一気に激論の場となり、各人が自説の論理化を強いられました。こうした中で、1977年の「エイコス」創刊がなったと言えましょう。小林君の強力な推進力のおかげです。因みにこの我々の研究誌名「エイコス」は、橋本君と小生の共通の恩師の一人、故戸張智雄先生の勧めで決めました。「真実らしさ」無には夜も日も明けぬと言うことで、そのギリシャ語を拝借したのです。

ところで「エイコス」第一号を出した前後から、我々が例会で精読するテキストも私底しはじめ、

またそれらの作品だけでは'30年代を論ずるには不十分だということも分かってきました。そこでフランス国立図書館等に依頼して、当時の刊本をマイクロフィルムで集めようということになりました。幸い、神保君の勤務先の関係で第一回目は、慶應大学日吉フランス語教室予算を利用できることになり、'30年代悲劇を中心に30作品ほどのマイクロフィルムを入手できました。(その後、伊藤先生、竹田先生、戸口君、橋本君らの文部省科研費がおり数十作品、'90年代に入ってから、伊藤先生と橋本君の個人研究費で約100作品と、現在我々の手元には17世紀演劇200作品弱のマイクロフィルムのコピー紙に起こしたものが揃うようになりました。)マイクロが到着し、次々にコピー紙に起こして行きました。この頃から例会のあり方も変化し、月二回になり、テキストの精読も続行しましたが、作品の紹介・発表が中心となりました。伊藤先生ですら未読のものも多く、辛うじてランカスターなどを頼りに必死で読み発表したことが懐かしく思い出されます。その成果が、多少刊行は遅れましたが、第二号に反映しております。

さて、今振り返ってみますと、'80年代は我々の研究会、特に「エイコス」刊行面で危機を迎えておりました。'70年代は会員数は少なかったけれど向学心に燃え非常に士気が高かった。'80年代の後半以降は優れた新会員が増え、活況を呈している。それを思うと、'80年代の前半はまさに中だるみの数年間だったとしか言いようがない。小林君が叱咤し、岩瀬研以来の古くからの仲間の戸口君や、西南学院に行かれた真下さんが論文を寄せて下さったにもかかわらず刊行には到らなかった。少ない会員の中で、伊藤先生を始め殆どの会員が留学・研究休暇等で長欠を余儀なくされたことが大きな理由でしたが……しかし例会は残った者たちで細々とではあるが途切れることなく続けられました。

'80年代後半になると、筑波からモリエール研究の大越君、青山学院からラシーヌ研究の千石さん、立教からロトルー研究家でご自身も踊られる鈴木さん、桐朋から16・17世紀音楽とバレエ研究の関根さん、芸大から音楽理論とバレエ研究の丸山さん、東大・パリ大からラシーヌ研究の浜野さん、慶應からはパリ大学で博士論文を書いてきたコルネユと劇理論の片木君、パリで優れたドービニャック論を書かれ明治に職を得た萩原さんらが新たに仲間に加わりました。例会での研究発表の対象も、従来の悲劇・喜劇に加えパストラル、宮廷バレエ、オペラ等へと広がって行きました。「エイコス」の方も7年にも及ぶ休刊期を置いてしまいましたが、やっと'87年になんとか第三号を刊行することができました。この号から伊藤先生の発案で、マイクロフィルムで取り寄せた作品を中心に「梗概集」を巻末に掲載することになりました。我々の論文の中に梗概を入れる手間を省くと共に、非専門の研究者やこれから17世紀の研究に進む若い学生・院生の方たちにも多少は寄与するのではないかと趣旨からです。その後、四号以降は多少苦しい時もありましたが、また戸口君、真下さんには再度ご迷惑もかけましたが、小林君の強力な推進で刊行を続けられるようになりました。新たに加わった会員諸氏、特に女性たち野池さん、千石さん、萩原さん、鈴木さん、'90年になってから参加した中央の戸張先生門下の浅谷さんが論文に梗概集に多く発表して下さいの大きい。中でも特筆すべきは浜野さんです。NHKの国際局を定年でおやめになってから、東大に入りなおしラシーヌの勉強を始め、パリ大学で博士論文を書かれ帰国されてからは、我々の研究会

の会員になられ例会にも余程のことがない限り参加され鋭い意見を述べ、若い者から新情報を貪欲に吸収されております。伊藤先生と並んで我々の精神的支柱として君臨しております。大変な高齢を迎えてもなお研究心旺盛で、論文執筆が生きがいとおっしゃり何本も「エイコス」に常に新しい視点を加えつつ書かれ、今回も論文を寄せて下さいました。

90年代の半ばになると、有為な新会員が加わりました。中央から鈴木康司先生の下でモリエールを勉強してきた富田君と、上智から田中仁彦先生門下でボワローを中心に幅広く絵画論なども研究している白石君です。今や両君は研究会の中心で、「エイコス」編集責任者及び会計責任者として会を支えてくれております。

世紀が改まり21世紀となると、さらに若い会員が加わりました。明治からオペラを勉強する大沢君、東大からコルネイユ研究の千川君、一橋からオペラ研究の西村君、成城からラシーヌ研究の関本君です。そして最も新しい会員が早稲田で教鞭をとるフェヌロンの研究者のデュシュドさんです。この十年の例会の変化を略述すると、開催が月一回になったこと、時に伊藤先生の研究室に入れなくなり別室を用意しなければならないこともありました。若い人が増えたこともあり、発表の回数が減り、再び精読会の色彩が強くなりました。オペラ台本を読んだり、劇理論書をかなり詳細に読んでおります。また萩原さん中心にレトリックからのアプローチも続行中です。最近の顕著な変化は、デュシュドさんが加わり議論の半分近くがフランス語でなされるようになったことです。「エイコス」創刊号に激励文を寄せて下さった故岩瀬先生が、演劇（劇文学）に特化せず幅広く勉強なさいと言われたことが、今ようやく根付き始めたと言ったら手前味噌が過ぎるでしょうか。

この回顧の最後に二人の古い会員について述べておきたい。戸口君は勤務先が長崎にあるため、例会には年に二、三回しか参加できません。長崎にあって「エイコス」の危機を救われんとして論文を送ってくれたことが一再ならずあったことは既に述べました。彼は元々劇文学派でラシーヌ論も一本に纏めておりましたが、25年位前からでしょうかヴァルラン・ル・コント研究（「エイコス」II、長崎外国語短期大学『論叢』所収）に手を広げ、さらに16世紀末から17世紀初頭の劇場・劇団関係の基礎資料を渉猟しております。その後も古文書資料の一覧及び分析を掲載し、我々が手放せないホルスボオエルの『オテル・ド・ブルゴーニュ座』の中に瑣末ではあるが何か所かの間違いを発見するなど地味だが貴重な実証研究を続けています。さらに「エイコス」既刊全号の電子化も彼の手で完成しております。ご利用なさりたい方は <http://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/toguchi/eikos/index.htm> までアクセスしてみて下さい。（我々の所持するマイクロフィルムの作品リストも現在作成中です）最後に2000年に、小生と共に研究会のはじめからの参加者で中心人物である橋本君が『遠近法と仕掛け芝居——十七世紀フランスのセノグラフィ』（中央大学出版部）を上梓したことを報告します。30年前からの研究テーマを発展させた非常に優れたセノグラフィ研究の労作です。伊藤先生の学恩と、研究会と「エイコス」が発表の場として多少は貢献したと思われ、会員の一大成果として喜びたいと思います。

以上35年に及ぶ17世紀フランス演劇研究会の大まかな回顧をしてきました。長い年月の中には他にもかなり多くの人のお出入りはありましたが、定着した会員の方たちの少なくともお名前だけは

すべて挙げてきたつもりです。数は少ないかもしれませんが、ここに挙げた20代から90代の会員は皆、包容力のある伊藤先生を慕って先生の下で17世紀の演劇・思想等の勉強を続けているのです。

この文を終えるにあたって、もう一度、伊藤先生にお礼の言葉を述べたいと思います。先生は、研究・教育・学会活動の傍ら、'80年代には早稲田大学の学生部長、'90年代には大学理事、この5年は演劇博物館長と桁外れの激務をこなしてこられました。他人には任せられず、主要なことはすべてご自分でやらなければ気がすまないご性格を思うと、それはそれで大変なことで、よくお体がもったと寒心に堪えません。その間も、例会にも極力顔を出され、適切な助言で我々を叱咤して下さいました。我々の遅々として進まぬ勉強の歩みに歯がゆい思いを抱かれ続けたことでしょう。今後、先生の研究室から萩原さん、デュシユドさんの研究室に勉強の場は移ります。さすがに先生にも自由に使える時間が増えるでしょうから、ご自身の研究だけでなく、再度、本腰を入れて17世紀フランス演劇研究会の再強化に腕を振るっていただきたいと願ってやみません。